



広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
京都大学医学部保健学科



大学院医学研究科人間健康科学系専攻開設記念行事
(関連記事 25 P)

目次

- 人間健康科学の推進にギアを入れる
人間健康科学系専攻長 笹田 昌孝… 2
- 退任等挨拶
 - 検査技術科学専攻 教授 福田 耕治… 3
 - 検査技術科学専攻 教授 月田 早智子… 4
 - 作業療法学専攻 助教授 種村 留美… 5
 - 作業療法学専攻 助手 小野 泉… 6
 - 看護科学コース 助教 宮田 雅子… 7
- 新任等挨拶
 - 看護科学コース 教授 鈴木 真知子… 8
 - 検査技術科学コース 教授 杉本 直三… 9
 - 検査技術科学コース 教授 齋藤 邦明… 10
 - 検査技術科学コース 教授 精藤 明敏… 11
 - 看護科学コース 講師 渡邊 浩子… 12
 - 看護科学コース 助教 久保田 正和… 13
- リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)
助教 東海林 美希子… 14
- リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)
助教 白井 はる奈… 15

- リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)
助教 松林 潤… 16
- 研究ノート
 - 看護科学コース 教授 菅沼 信彦… 17
 - リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)
助教 松林 潤… 19
- 教育活動
 - 検査技術科学コース 准教授 池本 正生… 21
- 医学部保健学科新入生合宿研修
学生厚生支援委員会委員長 成木 弘子… 23
- 大学院医学研究科人間健康科学系専攻開設記念行事
開設記念事業委員会委員長 櫻庭 繁… 25
- オープンキャンパス
オープンキャンパス部会長 齋藤 ゆみ… 27
- 健康科学市民公開講座
健康科学公開講座部会長 若村 智子… 29
- 人事異動… 31
- 計報… 31
- 日誌… 32
- あとがき… 32

人間健康科学の推進にギアを入れる

人間健康科学系専攻長 笹田昌孝

保健学科がスタートして4年目となり、平成20年4月には第一期生が巣立つ。そしてその4月から学科の名称が人間健康科学科となる。平成19年4月には大学院「人間健康科学系専攻」の第一期生を迎え入れた。また、すでに大学院博士課程の設置準備に入っている。学生諸君は勿論のこと、私共教職員は新しい組織のもとで望ましい医療を目ざして、さらなる教育・研究・診療を発展させるべく本格的なスタートを切る。

これまで長年にわたって真の健康を一人一人の個人のレベルで実現するため新しい学問「人間健康科学」の理論と方法・実践について検討し、具体化に向けて歩を進めて来た。私共のこのような方向性とそれが持つ意義は支持、注目され、その社会的需要は極めて高いものになりつつある。我が国の現状を踏まえて将来を語る時、最も重要なキーワードとして「人の真の健康」に収束する。このキーワードこそ私共が追求してきた理念の中心であり、従って人の真の健康を実現するため、私共が中心的な役割を果たさねばならない。勿論私共だけの力で発展・達成できるものではなく、他領域と協働・融合することが必要である。ここに新しい学問領域が誕生することになる。

京都大学医学部が工学部、薬学部、理学部、農学部などと、さらに人文社会系学部と連携しながら、その卓越した知材を駆使するならば、追求する「真の健康」の具体像を描くことが可能であろう。それは例えば、我が国の将来に夢を持った若者が中心となって稼働し、のびのびとした子供たちといきいきとした高齢者が共生する社会の姿ではないだろうか。このような姿を実現するために

は、行政や経済の視点からの指導・協力が不可欠であり、種々の課題を解決するための研究・人材育成・技術開発は、理念を共有した学・官・産の連携によって前進すると考えられる。医学・医療を通して望ましい健康を創生するのみならず、広く他分野と連携・融合することによって、到達点はさらに高くなり、また我が国のみならず国際社会における責務を果たすことが可能となる。

次代に活躍する本学の熱き思いを持った若い生徒が中心となって、真の健康創生に向けて着実な歩を進めたいところである。

現在学舎は大改装中である。来る4月には新しい教育スペース、研究スペースにおいて基本的に整えられた組織体制のもとで教育・研究がスタートする。そして、高井リサーチセンター並びに杉浦地域医療研究センターが開設され産学連携の具体的な始動が実現することとなった。希望に満ちた新入生のような思いで人間健康科学の推進に向けてギアを入れて発進しよう。



退任のご挨拶

元検査技術科学専攻 教授 福田 耕 治

この3月で退職しました。お世話になった諸先生方に改めて御礼申し上げます。在職期間6年7ヶ月の間に医療技術短期大学部は大きく変わりました。この変革で私が関わったことについて振り返ってみます。

平成15年10月医学部保健学科設置、平成16年4月国立大学法人京都大学設立、平成19年4月医学研究科・人間健康科学系専攻の開設と続きました。

設置認可により、保健学科のカリキュラム作りが急がれました。学生は一般教養科目を他の学部学生と同様に全学共通科目として受講することになり、カリキュラムは各専攻の①専門科目、②専門基礎科目（全専攻学生必修）、③全学共通科目（自由選択）で構成されることになりました。それに基づき時間割表を作成し、新入生に備える必要があります。私には、`専門科目や専門基礎科目と整合性がとれる全学共通科目受講の方法を考える`という任が回ってきました。

多くの先生方の協力を得て全学共通科目時間割表ができ、新1回生を迎えることができました。

専門科目や専門基礎科目の中に選択科目を設けてはどうかとの意見も聞かれました。

修士課程が始まり、博士課程の準備段階と聞いています。学部と大学院の整合性ある教育プログラムを常に検討して頂けるとと思っています。

保健学科教員による全学共通科目への協力という問題がありました。高等教育研究開発推進機構（通称：機構）からは「短期大学部総合教育教員7人を保健学科教員として任用する場合、教員7人分の教育負担を全学共通科目で全うせよ」と申し渡されていました。このため、保健学科から提供する全学共通科目創作に多くの先生のご苦勞が必要となり、その協力が得られました。今後ここ

の問題で苦勞することが予想されます。

検査技術科学専攻には他大学には無い「情報理工医学講座」が置かれました。高度医療機器に対応できる医療技術者の養成、大学院を念頭に置き、高度医療機器開発等の実際に携わる技術者の輩出を想定したものです。これは京都大学の医工連携のプログラムに沿ったものと言えます。

しかし、短期大学部時代には無かった「情報理工医学講座」の教育と研究を行うインフラ（空間と器機設備）を準備することは大変な問題でした。

平成14年、総長裁量経費「高度医療情報システム」でいくつかの器機を購入でき、白眉寮2階に展開しました。そこが「情報理工学講座」の最初の教育・研究の場となり、「情報理工教育室」と「2つの準備室」を確保できました。退職直前に耐震改修が降って湧き、研究新棟の計画が始まりました。白眉寮に既設されている「情報理工教育室」と「2つの準備室」を前提に改修後の教育・研究のスペースを要望しました。もし、白眉寮の空間を確保していなかったなら、耐震改修後のスペース確保が幾分困難になっていたと思っています。

京都大学にだけある「情報理工医学講座」から優秀な医療技術者が輩出されることを、また医学研究科・人間健康科学系専攻が今後さらなる発展を遂げることを、また保健学科が新しい学部となり、日本においてこの分野で牽引の役割を担うことを期待し、諸先生のご活躍を祈念致しております。



異 動 の ご 挨拶

元検査技術科学専攻 教授 月 田 早智子

本年4月に大阪大学大学院生命機能研究科（医学系研究科兼務）に異動致しました。京都大学医療技術短期大学部および京都大学医学部保健学科には、13年間大変お世話になり、心より御礼申し上げます。元来、教育と研究はきってもきりはなせない関係にあると感じておりますが、教育と研究、そして学科運営という立場から、様々な分野の教職員の方々、そして若い学生の方々との交流ができた環境はこの上もなく貴重なことであったと実感しております。在職中に多くのことを教職員の方々、そして学生の方々から学ぶことができました。重ね重ね御礼申し上げます。

私自身は、研究をはじめた東京大学から、東京大学臨床医学総合研究所、岡崎共同研究機構生理学研究所、京都大学、大阪大学と30年の間に西へ西へと国内を異動しているということになっております。場所を異動するごとに気分が変わり、また、研究のスタイルなども変化するに伴って、教育と研究の内容も変わっていくような気がしております。なかでも京都大学での13年間は、主人の月田承一郎と共に研究のことを発展的に大きく考えられ、研究上仕事の流れがきまった時期でもあり、教育内容も含め、公私共々充実した時期を過ごさせていただきました。このことはなににも代え難い貴重な財産になっていると思っておりまして、今後もさらに発展させていきたいと思っております。いまになってみると、京都大学の大きな特長を新たに実感しております。深い伝統にねざした自由な気風というか、自由さといっているいろいろな気がある中に、奥深い創造性を育むなにかがあるような気がしております。現在の研究室のメンバー

も京都大学からのメンバーが大半をしめておりますが、大変若いメンバーに励まされて過ごしております。教育というのもおこがましいのですが、スタッフ、そして大学院・学部学生と研究を共におこなっていくなかで、決してひとりではなしえない新しいものをつくりあげていくことができるような気がするというのは、京都大学で培われた素地によるものなのかもしれません。今後の展開を楽しみにしていく中で、「おもろいことをやろう」という生命機能研究科のキャッチフレーズに共感しつつも、お世話になった京都大学医学部保健学科在職中にはぐくまれた方向性をなんとかユニークに発展させていきたいと切望しております。今後何かにつけ皆様に連携をいただけますと、大変有り難くよろしくお願い申し上げます。京都大学医学部保健学科の、新しい局面を迎えてのましますのご発展を願いつつ、ご挨拶にかえさせていただきますたく今後ともよろしくお願い致します。



退任挨拶

元作業療法学専攻 助教授 種村 留美

早いもので、神大に異動して一年近くが経ちました。京大での7年間は、臨床・教育・研究と大変充実した年月を過ごさせていただきました。

特に保健学科になってからの学生教育や京大病院リハビリテーション部との臨床共同研究は、かけがえのない宝物となりました。手塩にかけた保健学科1期生もいよいよ卒業ですね。

神大保健学科（4月より大学院保健学研究科）は、神戸の西、須磨区の小高い丘の上にあり、山と海に囲まれた、風のとおりの良い場所にあります。晴れているときは、私の部屋から明石や須磨の海が良く見えて、原稿書きなどによる目の疲れを癒してくれます。京大にいるときにその役割を果たしてくれていたのは、大文字でした。また、京都にいるときは気がつかなかったのですが、神戸は高い建物が多くて驚きました。京都の夜の星の煌きが美しかったのは、そういう意味があったのだとあらためて思いました。神戸の地から京都を懐かしく思い出しています。

さて、神大での私の近況を少し述べさせていただけます。新たに受け持った科目も多くあって、後期は7コマを担当しましたが、熱心な学生に助けられて私も日々スキルアップしているようです。臨床の醍醐味を学生にどうやったら伝えられるのかを、毎日考えているような気がします。それを思うと、大学病院が隣にあった京大での臨床活動は、本当に貴重でした。

神大は国際色豊かなので、赴任以後、海外との共同研究や国際協力、国際学会発表など、海外に出かけることが増えました。昨年は、ベトナムの国立チョーライ病院（日本のODAで建設）で、

日本のリハビリテーションの現状を伝えてきました。ベトナムには理学療法教育施設は3校ありますが、作業療法はまだありません。ベトナムはバイク王国なので（しかもノーヘル）、チョーライ病院では頭部外傷に対するオペが一日200件もあるそうですが、私の専門である頭部外傷後の高次脳機能障害のリハビリテーションは、まったく手がつけられていない状況でした。専門職の障害理解が少しでも進むように、今年も引き続き伝えていきたいと思います。また、ソウルであった国際リハビリテーション医学会では、研究グループでタレントショーに出演し、the second prizeに輝き、賞金もいただきました（その日のうちに打ち上げカルビに消えましたが）。でも、できれば学会発表の内容でawardをもらいたかったです。

やるべきことや、やりたいことは数多くあって、これからの一生でどれだけ消化できるかわかりませんが、天命を知る歳となったので、「人生これから」と新たに学び、新たに伝えようと思う今日この頃です。

また、先生方とお目にかかれる日を心待ちにしております。

姫路からの近況報告

元作業療法学専攻 助手 小 野 泉

京都大学医療技術短期大学部を離れて早くも8ヶ月が過ぎました。在任中は皆様に大変お世話になり心より感謝いたしております。

さて、新任の地姫路は中播磨に位置し、瀬戸内海に面した穏やかな城下町です。私の勤務する姫路獨協大学は、姫路城の北方で西には書写山があり学舎からは姫路市内が一望できます。この大学は、姫路市と獨協学園の公私協力方式により設立され、開学時は外国語学部と法学部からスタートしました。後に、市民の声を尊重した大学運営により医療保健学部、薬学部を開設し5学部2大学院を持つ今年で創立20周年を迎えた若々しい大学です。医療保健学部は、地域貢献を合い言葉に、学生や教職員・同窓会がアイディアを出し合い様々な取り組みをスタートさせています。中でも注目されるのは、障害者の方々が大学のキャンパスでイキイキと活動されている姿です。これは、障害を持つ方々が授産活動から就労の場へと環境を変えながら積極的に社会参加できるよう計画された施設を持っているからです。『Café ぴあのぴあ〜の』と命名されたカフェでは、スタッフの方々がすばらしい笑顔で教職員や学生を迎えてくれます。また、作業療法学科の作業学実習では、地域の授産施設に通われている障害を持つ方々が学生の基礎作業技術の指導を行っています。障害を持ちながらも長年の努力で培った卓越した技に触れることで学生は知識の習得に留まらず、個性を尊重することの重要性を知り大きく成長しています。

私の日々の生活といえば、2008年度後期から始まる臨床実習施設の確保に追われる毎日です。

臨床実習施設に関しては、作業療法教育が始まって以来ずっとこの様な状況が続いています。この背景には、養成校と定員の増大、そして医療現場の事情が有るといわれています。学生の臨床教育は未来の作業療法発展に大きく影響する重大な基盤づくりであることを肝に銘じなくてはなりません。もう一つ、ライフワークとしての義肢装具の製作ですが、近年の医療技術の進展に伴い、切断を選択しなければならない人の数は減少しています。しかし、少数であっても義手の装着を必要とする方々が快適に過ごせるような義肢ソケットの改良を続けております。

最後になりましたが、京都大学医学部保健学科におかれましては大学院修士課程も順調に学年進行を遂げ、校舎・研究棟の整備も着実に進みつつあると伺っております。より良き環境の基で医学部保健学科の皆様がますますのご活躍と、健康科学の教育研究の充実・発展をされますことを願っております。

写真は『Café ぴあのぴあ〜の』の風景
「ぴあのぴあ〜の」とは「ゆっくり、あせらず」との意味です。



退職のご挨拶

元看護科学コース 助教 宮田 雅子

教職員の皆様には、大変お世話になり有難うございました。

私は、今回初めて教員という立場に立たせて頂きましたので、戸惑うことも沢山ありました。しかし、多くの方々にお力を貸して頂き、沢山のチャンス进行、本当に感謝しております。

短期間ではありましたが、とても濃厚で新鮮な経験が沢山ありました。教育では、学生と病院実習に行ったことがとても印象に残っております。始めは、学生が何を考え、感じ、そして私は何を手助けするべきなのかがわからずに苦労しました。しかし実際は、私の気負いとは裏腹に、私から学生に何かをするということは少なかったです。学生自身が主体的に取り組もうとする姿勢がよい実習につながったと感じております。これも私にとっては発見の一つでした。

私は、急性期看護というグループの一員として研究に取り組んでいます。京都大学に来てから、生体肝移植患者の退院後の精神状態と家族との関係を考え、研究を進めることが出来ました。京都大学医学部附属病院は生体肝移植の金字塔ともいえる病院でしたので、研究を進めるにあたり、病院スタッフの方々をはじめ、同講座の先生方に、的を射たご教示を頂いたことをとても感謝しております。また、日本学術振興会科学研究の若手研究の補助金を頂き、アロマテラピー使用によるリラックスが術後呼吸機能改善に及ぼす影響を検証しようとして進め始めた段階で、退職となってしまったことをとても残念に思いますが、今後も続けていくべき研究課題だと思っております。

保健学科自体が、教育と研究、そしてその他の

仕事もあり・・・、と大変忙しい職場であり、なかなか何か一つに熱中できるという環境でないことは実感しましたが、周りの皆様の知識の豊かさ、研究がしやすい環境に恵まれた素晴らしい職場でもありました。こちらでの経験を生かし、今後もよりいっそう目的を持って看護学の発展に貢献していきたいと思っております。今は、保健学科自体が変革期という時期であり、落ち着かないかもしれませんが、未来の保健学科のご発展を心からお祈り申し上げます。

本当に、有難うございました。



就 任 の ご 挨 拶

看護科学コース 教授 鈴木 眞知子

本年4月1日付けをもちまして、小児看護学の教授として京都大学医学研究科成育看護学分野に着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は生まれも育ちも京都、高校までは中京区の住人でしたが、大学からは京都を離れ、聖路加看護大学で学びました。そして今は、新幹線問題で話題になった滋賀県栗東市の駅前マンション、琵琶湖に沈む夕日がとても美しく、空と対話ができる14階に住んでいます。

私の主たる臨床経験は、淀川キリスト教病院で約11年間、途中2年間ほど救急を勉強することの大切さを思い、大阪大学医学部附属病院ICUでクリティカルケアの修練を積みました。昭和60年からは臨床で得た学びを整理する意味もあって、小児看護学講師として鳥取大学医療技術短期大学に赴任いたしました。その後、それまでの臨床経験や実習指導で出会った人工呼吸器から離脱できない子ども達とその保護者とのつながりから、長期療養児の看護や在宅療養への移行支援をテーマとし、2年間、聖路加看護大学修士課程で学びました。修了後は、滋賀医科大学付属病院看護部所属婦長として看護学科開設準備、看護学科小児看護学助教授として、滋賀医科大学には計4年間お世話になりました。さらに、修士課程でのテーマを発展させるため、当時は小児看護学の学位を有し、博士課程を開設していた唯一の大学、日本赤十字看護大学博士課程に進学しました。このように、私は実践で得た疑問を大学院で探求し、得られた結果を現場で応用するということをしてきました。

3年間の博士課程修了後は、赤十字とのご縁か

ら広島に開設された赤十字看護大学で7年間小児看護学の教授、内、3年間は研究科長を務めさせていただきました。広島では、私の研究テーマであった人工呼吸器など、いわゆる最も介護度の高い超重症児とご家族並びに、その支援者を対象に、在宅医療の推進という時代の要請もあり、地域支援活動の一環として、直接支援や講演会、技術指導講習会、専門職者との事例検討会などを行ってきました。在宅医療は入院中の看護と切り離して行われるものではなく、入院中によりケアが提供されなければ、在宅への移行は難しく、その後に続く自宅での介護や支援もまた、困難なものになります。したがって、急性期における看護の重要性を視野に入れながら、小児の在宅療養支援のあり方を検討していき、それらを学生の教育にも還元していきたいと考えています。

来春には新棟に地域支援センターが開設される予定とお聞きしています。まだまだ課題の多い在宅医療、そのなかでも特に立ち遅れている小児在宅療養支援のあり方を、京都大学から世界に発信できる研究拠点の場となるよう微力ながら努力してまいりたいと考えています。皆様のご指導を、何卒宜しくお願い申し上げます。



就 任 の ご 挨拶

検査技術科学コース 教授 杉 本 直 三

2007年4月、本学の情報学研究科より異動となり、検査技術科学専攻の情報理工医学講座（大学院では情報理工医療学講座）に着任致しました。どうぞ宜しくお願い申し上げます。着任後はや8ヶ月が過ぎましたが、まだまだ慣れないことも多く、諸先生方や事務職員の皆様方にはご迷惑をおかけしております。この場を借りてお詫びと御礼を申し上げます。また、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

私は本学の工学部・電気工学第2学科（夜学ではありませんよ；今の電気電子工学科です）を昭和60年に卒業しました。当時ME（Medical Electronics）と言われた領域に興味を持ち、その分野で卒業研究をおこないました。修士では研究テーマを変更して制御工学分野の研究をおこないましたが、修士修了後に卒論のときのご縁で国立循環器病センター研究所の研究者として採用して頂きました。そこで得た研究テーマが医用画像処理、特に心臓血管系を対象とした画像計測に関したもので、それで学位を頂き、その後現在に至るまでの私の研究テーマとなっています。

さて、ここで顔写真（？）について少し説明させていただきます。画像処理が専門ということで、手を加えた画像を掲載させて頂きました。元の画像は私のポートレートですが、前の研究室の大先輩が開発された非線型スムージングフィルタ（Kuwahara Filter として広く知られています）で処理したあとでエッジ強調を施したものです。Kuwahara Filter によりエッジを情報を保ったま

ま雑音除去が可能であり、画像特徴を捉えることにある程度成功しています。しかし、もとの画像が悪いと後の処理では如何ともしがたいことがあるというのもまた事実ですね。

循環器病センターに10年間勤めたあと、思い掛けず出身学科の研究室に助教授として迎えて頂きました。そして10年間勤めたのちに、この4月より保健学科にお世話になることとなりました。思えば10年ごとに工と医の間を行ったり来たりしていますが、今度はここにじっくりと腰を据えて、画像情報という切口でもって人間健康科学の発展に寄与できるよう、教育および研究に携わって行く所存です。

このところ世間では「医工連携」がはやりのようですが必ずしも成功しているわけでは無いようです。ひとつには「医・工・連携」という考え方が良くないようにも思います。別々にある医と工が単に連携するといったものではなく、たとえば「医工融合」（この言葉ももう一つですね；現在良い言葉を搜しているところです）といったもっと上のレベルを目指す必要があるのではないのでしょうか。この意味で工学部出身の私がここで活動の拠点を頂いたことは大きなチャンスを頂いたことだと捉えています。このチャンスを生かすべく努力してゆく所存ですので、どうぞご指導とご支援をいただきますようお願い申し上げます。



人との繋がりを大切にした研究、教育

検査技術科学コース 教授 齋藤 邦明

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻検査技術科学コース教授を平成19年5月付けて拝命しましたのでご挨拶申し上げます。

私は、約5年間の米国国立衛生研究所（NIH）でのエイズ脳症に関する研究後、岐阜大学医学部に助手として着任し、講師、付属病院検査部副部長、大学院医学系研究科助教授として、TNF- α をはじめとしたサイトカイン遺伝子組み換えマウスによる病態解析を主な研究テーマとして、多くのスタッフ、大学院生と日夜研究に頑張りました。この間、NIHから上席研究員として2回招聘され、プロテオーム解析に関するプロジェクトリーダーとして多くの研究者と親交を深めさせて頂いたことは私にとって大きな財産であります。

私は、自分のライフワークであり、近年 Nature、Science などの質の高い学術雑誌でも取り上げられ、インターフェロンガンマや TNF- α など種々サイトカインで酵素誘導される新たな免疫調節因子である indoleamine-2, 3-dioxygenase (IDO) に関する研究テーマを発展させたいと考えています。また、プロテオーム、メタボローム解析技術を応用した新しい病態解析システムの構築がしたいと考えています。すなわち、個々の医療に対応すべく、薬の副作用、薬効予測が迅速に安い費用で実施できるシステムの構築を目指します。私が今日まで研究が続行できたのは、多くの共同研究者、私と日夜研究に励んでくれた大学院生ほか、人との繋がりが極めて大きいと考えており、これからも今まで築いたネットワークを充分活用して、さらには新たに京都大学のネットワークを加えられるよう努力し、世界に通用する人材の育成を目

指して努力する所存です。また、現在検査関連で新しい職域の開拓が期待されている食品分野に関連して、NPO 法人日本食品安全協会（JAFSRA）の理事としても微力ながら社会貢献できればと思っています。JAFSRA は今年7月に正式に設置が認可され、今後健康食品を含めた食の安全、安心のための幅広い社会貢献を目指して頑張りたいと考えておりますので皆様方のより一層のご支援をお願いする次第です。

春に着任した時は一期生の大学院生とゼミ生2人がすでに配属されていました。しかし、現在オフィスとラボは全面改修中で、研究室の本格的な始動は来春になる予定です。今後は皆様方にご指導ご鞭撻頂き、誠心誠意努力致しますので何卒宜しくお願い致します。



「 新 任 の 挨拶 」

検査技術科学コース 教授 精 山 明 敏

平成 19 年 9 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻情報理工医療学講座に着任しました、精山明敏（せいやま あきとし）です。

本学に着任前は、大阪大学医学系研究科分子生理学講座、同大学大学院生命機能研究科ナノ生体科学講座において、ヒトを対象とした MRI、光トポグラフィー、脳波計測装置などの非侵襲生体機能計測技術を応用したマルチモダルな同時計測システムの開発や、特に、健常人を対象としてヒト脳機能解明に取り組んできました。また、上述の生命機能研究科においては、小動物を対象とした NMR イメージング、分子プローブ開発、光学イメージングの三位一体の技術開発を目指した高度生体機能イメージング施設の設計とプロジェクトの立ち上げを行い、実験動物を用いて次世代の生体機能計測の開発や、生体機能発現の機序解明を行ってきました。現在、個人的に研究面で力を注いでいるのが、「ニューロカロリメトリー法の開発と脳の動作原理の解明」と Brain Computer (or Machine) Interface への応用です。これまでの私の研究成果は、既存の機能イメージング技術 (fMRI、MEG、PET) から得られる情報の decoding と encoding からだけでは脳機能の解明が困難であることを示唆しております。このため、脳活動に伴う脳内局所温度変化を測定し、脳活動のユニットエネルギーを測定するイメージング技術 (Functional Temperature Magnetic Resonance Imaging) を開発・応用することにより、脳の動作原理の解明 (生物物理学的モデル化も含む) を目指す、さらにレベルの高い脳機能計測技術の開発に取り組んでい

ます。

そして、これらの研究を通して、1) 脳情報を解読し、抽出し、処理する技術、2) 脳に学んだ自己修復、自己組織化の可能な自律的ロバネストネットワーク、3) 脳が実現している可塑性、柔軟性、意図抽出の可能なハードウェア、など、Brain Computer (or Machine) Interface への科学技術への取り組みを目指しています。



新任のご挨拶

看護科学コース 講師 渡 邊 浩 子

4月より京都大学医学部保健学科の家族看護学講座に着任致しました。

火の国、熊本出身の肥後女です。京都に住むのは初めてで、まるで観光客かのように日々、町歩きを楽しんでいます。しかし、未だに東西南北がわからず、京都特有の“東に入って南に下ル”、“西に入って北に上ガル”などの方角の説明にえっ？どっち？とまごついています。

私は、助産師として東京都内の大学病院の産科病棟と新生児集中治療室（NICU）で周産期医療に携さわった後、オーストラリアの大学院の修士課程で助産学を学びました。オーストラリアでは妊娠経過が正常であれば妊婦健診も助産師が担当、分娩経過が正常であれば医師の立会いなく助産師のみで分娩介助ができるなど、助産師の専門性を発揮できる場が提供されていました。在学中は外来・病棟実習、そして20例の分娩介助実習を通して、周産期医療の現場を体験する機会を得ました。時にはオージーの繊細さに欠けるケアに驚くこともありましたが、「Welcome to the world!」といって幸せそうに赤ちゃんを取り上げるオージー助産師の姿は忘れられない思い出となっています。

帰国後は静岡県立大学看護学部で助手として勤務した後、東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻の修士・博士課程に進み、研究の基礎を学びました。発達医科学教室というところで、胎児期に低栄養状態に暴露されると将来、成人病を発症するという「胎児期成人病発症説」を明らかにするための疫学研究に携わりました。教室では「とことん考えて、とことん議論する!」が鉄則

で、常に探求心を持つことの大切さを学んだ5年間でもありました。院生の半分は中国、タイ、ベトナム、パキスタンなどのアジア7カ国から小児科医やパラメディカルバックグラウンドを持つ留学生という異国情緒の漂う中で、いろんな文化に触れながら実験や研究に取り組みました。留学生の中には家族や幼い子どもを母国に残し、単身で日本に来ている女性も多く、彼らの研究に取り組む熱意や姿勢に刺激を受けたものです。彼らとの出会いは私の財産となっています。

本学科はH19年度に大学院も開設され、学部生、大学院生、そして教員の研究に取り組む体制が整備されております。母性看護学、助産学の講義、実習の中で、共に学生さんと学び、母子保健の向上や臨床に還元できる研究を続けていきたいと考えております。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



新任のご挨拶

看護科学コース 助教 久保田 正 和

4月より地域保健看護学講座（高齢者看護学分野）助教に着任いたしました。着任後、早くも半年が経過しましたが、未熟者ゆえ未だに学生に間違われる毎日です。

私が京都大学へ来て最初に驚いたことは、看護学を専攻する男子学生の多さです。私の学生当時はまだ看護系大学も少なく、同年入学した男子学生は私を含めて2名でした。必然的に目立つ存在となり、自主休講しようものなら、先生から「あら、久保田君いなかったね。何してたの?」と言われ、実技のデモでは大抵男2人が先生方に指名されました。基礎看護の演習で、もう1人の男子が同級生に笑顔で囲まれ、ズボンを下ろされた後、臀部に筋注されている光景を見た私は、そっと演習室から逃げ出したことを覚えています。私は小学から大学まで野球漬けで、男くさい中にいましたので、女性ばかりの環境に慣れるのには時間がかかりました。その点、京大の男子学生達がリーダーシップをとって看護学専攻を引っ張っている様子を見ると、頼もしく、羨ましくもあり、また、時代の変化も感じます。今後「男の看護婦さん」などと言われないような時代が到来し、男子が様々な分野で活躍できる看護師、保健師になることを願っています。

遅ればせながら自己紹介させていただきたいと思います。私は浜松医科大学医学部看護学科を卒業後、脳科学に興味を抱き、名古屋大学大学院で医科学を専攻し、生理学の研究に携わりました。そこでは朝から晩まで実験を行い、研究のイロハを学んだ充実の2年間でした。その後、博士課程に進学し糖尿病運動療法について生化学的手法を

用いた研究を行い、修了後は名古屋大学総合保健体育科学センターで研究員をしていました。大学卒業後は研究に没頭した6年間でしたが、私にとっては研究手法を学ぶことや論文を書く作業よりも、多くの他分野の方と話をし、刺激を受け、大切な仲間を得られたことが一番の財産になっています。京大にも他学部の学生や先生方と話をする環境が整っています。学生には看護学専攻だけではなく、大学内外問わず多くの人と接して良いものは積極的に吸収してもらいたいと考えています。

私自身も今後、多くの方から刺激を受け続け、教育、研究ともに精一杯努力してまいりたいと考えておりますので、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。まとまりのない文章になってしまいましたが、今日が締め切りなのでお許しください。



就 任 の ご 挨拶

リハビリテーション科学コース（作業療法学講座） 助教 東海林 美希子

この4月より作業療法専攻の助教として赴任いたしました。医療技術短期大学部を14期生として卒業し、早いものでもう9年になります。このようにしてまた母校に戻ってこれるとは、思いもよらぬことでした。

医療技術短大卒業後この3月までは、京都市内の知的障害児通園施設に勤務しておりました。週3回通ってくる就学前の子どもたちのクラス担任の一人として、保育士の人たちとチームを組んで働いてきました。子どもたちとプールに入ったり、山に登ったり、お昼寝で寝かしつけたり……。という毎日でした。生活をともにしながら、作業療法士として発達を促したり、生活やあそびを広げるための援助方法を工夫するのが私の役割でした。子どもたちの生活に深く関われる楽しさがある一方、施設内ただ一人の作業療法士としてどういう役割を果たすのか、色々と戸惑いや難しさも感じました。特に卒業後の数年間は暗中模索、無我夢中という感じでしたが、そのような時母校で学んだことや恩師からのアドバイスに本当に支えられ、一步一步前に進んでこれたと思います。

振り返ると私にとって医療短大での3年間は、人生の中でも特に強く深く影響を受けた3年間でした。作業療法士としての基礎知識や技術に加えて「人が生きることの意味」についても、深く考え、気づく機会が多かったです。また臨床面でも恩師の方々が対象者に関わることで対象者がどんどん活き活きとしてくる、そんな姿も印象的でした。また自分自身の生き方についても、色々難しさに出会いつつも方向性を失わずに進む、そんな姿勢も学んだように思います。

今度は学生としてではなく教員として、学生たちの学びを支える立場となりました。自分自身が学んだことの大きさを振り返るにつけ、自分の未熟さを感じますが、私も目の前の学生たちの成長に少しでも役に立てるよう、力を付けて行きたいと思います。

また今までは臨床中心の生活でしたが、研究という私にとって新しい世界でも努力を重ね、臨床に役立つ新しい視点を表現できるようになっていきたいと思っています。至らない点が多々あるかと思いますが、どうぞ皆様のご指導をよろしくお願いいたします。



着任のご挨拶

リハビリテーション科学コース（作業療法学講座） 助教 白井 はる奈

作業療法学専攻の助教として4月に着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

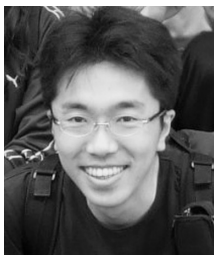
私は、京都大学医療技術短期大学部作業療法学専攻を1997年に卒業しました。高校生の時は父の影響もあり、体育の教員を目指していましたが、浪人して進路について色々と考え悩んだ結果、「スポーツや絵画、陶芸、料理など、様々な作業が治療手段になる」という作業療法の紹介文を読み、大変興味を持ち、作業療法士になることを決心しました。入学後、大阪に住んでいた私は、片道約2時間かけて通学していましたが、京阪特急の中で友人と語り合ったり、教科書を読んだり、提出課題の編み物などをして過ごしたことも今となっては良い思い出です。

医短卒業後、大阪府済生会中津病院に勤務し、脳血管障害、整形疾患、神経難病などを持つ患者さんのリハビリテーションに携わりました。中津病院は私にとっての最初の臨床の場で、患者さん、OT・PT・STの先輩方から多くのことを学ばせて頂きました。その後、広島大学に編入学し、大学院に進学しました。その間、非常勤で介護老人保健施設に勤務しながら、重度認知症高齢者の感情表出に関する研究などを行いました。広島では大学卒業後、4年間助手として勤務し、昨年の春に京都に帰ってきました。昨年度は京大病院デイケア診療部で、精神障害をもつ患者さんのリハビリテーションに携わり、今春から母校に勤務させて頂いている次第です。現在、ここ京都大学で、恩師や諸先生方から再び多くのことを学ばせて頂けることを幸せに思っています。

私の現在の研究テーマは、認知症をもつ方への

より良い作業療法的介入を探索することです。初心を忘れず、いつも患者さんやご家族の視点に立った臨床・研究を行いたいと思っています。今、学生時代に思い描いていた理想の作業療法士になれているかどうかと問われると甚だ疑問ですが、作業療法について学生たちと語り合い、学び合い、先生方からご指導頂きながら、人として、作業療法士として、一步一步成長していきたいです。そして、今ある環境とご縁を大事にして、楽しみながら、様々なことを一生懸命頑張りたいと思っています。

教育・臨床・研究のどの分野においてもまだまだ未熟者ですが、向上心を持って努力していく所存です。至らぬ点多々ありますが、どうかご指導の程よろしくお願い申し上げます。



新 任 の ご 挨拶

リハビリテーション科学コース（作業療法学講座） 助教 松 林 潤

作業療法学専攻の助教として本年四月に着任いたしましたので、ご挨拶を申し上げます。

私の経歴は昆虫の研究から始まっております。京都大学理学部の動物行動学教室にて、卒業研究としてショウジョウバエの行動リズムを調べたのが、私の研究生活の最初の一步でした。その後、理学研究科修士課程では、滋賀にあります生態学研究センターにてミツバチの巣仲間認識についての化学生態学研究を行ないました。しかし昆虫の研究を続けるうち、人間を対象とした研究をしたいという気持ちが強くなってまいりました。特に、私は高校時代より人間の睡眠について興味を持っておりましたので、博士課程では睡眠中の脳の働きについての研究をしたいと考え、医学研究科附属高次脳機能総合研究センターへ移りました。幸いなことに同センターには脳波や脳磁図などさまざまな脳機能研究の機器・技術が整っておりましたので、それらを利用して睡眠時の聴覚・体性感覚情報処理について研究をすることができました。作業療法学専攻では、博士課程で習い覚えた脳機能研究の技術をリハビリテーションの分野に応用し、周囲の先生方や大学院生が抱える臨床の場での疑問・課題を脳機能研究につなげていく役割を担っていきたいと思っています。

教育の面では、人体解剖学・人体機能学の実習と、研究方法論の講義を担当しております。基礎的な知識の伝達は当然のこととして、学生が自力で知識を蓄え新しい発想にたどり着くために必要となる「知的基礎体力」（ひとつのことを考え続ける力・情報を整理して縮約する力・ものごとを筋道を立てて述べる力）を鍛えるような講義・実

習を行なっていきたいと思います。

思い起こせば十二年前、理学部に入学したときに、何かの席で新入生として自己紹介をいたしました。そのときに抱負として「医療のサポートができるような研究者になりたい」と申しましたのを覚えております。紆余曲折はありましたが、私の人生はだんだんにこの抱負に近づいて来ているように思います。全力を尽くしますので鞭撻の程よろしく願いいたします。

研究ノート

私の「生殖医学」研究の過去・現在・未来

看護科学コース 教授 菅 沼 信 彦

「研究ノート」を書くようにご依頼をいただきましたが、私はこれまで「看護学」についての研究を行ってきた経験が少ないため、「医学」研究に関する過程と、今後の抱負を含めて紹介させていただきます。

<これまで>

私は1978年の医学部医学科の卒業で、今年でちょうど卒業30年になります。“ああ お前は何をしてきたのだと 吹き来る風が 私にいう”（中原中也）という心境の今日この頃ですが、これまでは産婦人科医として不妊・内分泌分野を中心に研究を行ってきました。

・基礎的研究

基礎的研究としては遺伝子を扱う実験を主としてきました。最初はプロラクチン（脳下垂体から分泌されるホルモンの一つ）のメッセンジャーRNAを測定していましたが、私が実験を始めた1980年頃は分子生物学もまだまだ発展途上の分野で、cDNAプローブも無く、ウサギ網状赤血球液（ウサギを溶血性貧血にし採血するところから自前で作っていました）を用いたcell-free translation系で蛋白に翻訳し定量化していました。やがてDNAプローブが手に入り、プロラクチン、成長ホルモン、胎盤性ラクトゲンなどの遺伝子発現とその調節機構を、ラット下垂体、ヒト胎児下垂体、胎盤などを用いて研究しました。

1987年に米国ワシントン大学に留学する機会を得、ゴナドトロピン（性腺刺激ホルモンの総称で、卵胞刺激ホルモン（FSH）、黄体化ホルモン（LH）、ヒト絨毛性ゴナドトロピン（hCG）が含まれる）の構造と機能の関連を、site-directed mutagenesisという手法で解析してきました。この方法は人為的にDNAの1-2塩基を部分的に置換することにより、1つのアミノ酸を変換した変

異蛋白を作る技術です。たとえばhCGのシステインをコードする配列（TGT）をアラニンの配列（GCT）に置き換えると、その変異hCGはその場所にシステインを持たないことになります。システイン同士はS-S結合を形成しますから、この変異hCGはこの部分のS-S結合だけでなくなくなった蛋白となるわけです。このような変異遺伝子を遺伝子発現細胞（外からの遺伝子によって蛋白を作ってくれるようなセル・ライン）に導入し、産生・分泌される変異hCGを野生型hCGと比較すれば、そのS-S結合という構造がホルモン作用に果たす役割が解る訳です。

一方、婦人科不妊外来では、ホルモン検査として血中FSHやLHをルーチンに測定します。帰国後の臨床現場で、患者の中にLHが測定感度以下、すなわち測定できない人がいることが見つかりました。これは当時、高感度のLH測定キットが開発・使用されるようになったためで、そこに使われているモノクローナル抗体では反応しないような構造異常を示すLHの存在が示唆されました。そこでこの異常LHの遺伝子を解析してみると、2カ所に塩基の置換によるアミノ酸の変異がみつかりました。さらにsite-directed mutagenesisの手法を用い、各アミノ酸変異の意義付けを行いました。すなわち、臨床研究に基礎実験法が役立ったことになります。

同様に持続性FSHをアメリカのラボで作りました。これはFSHの遺伝子のC端にhCGのC端ペプチド遺伝子をくっつけたものです。hCGは他のゴナドトロピンより循環血液中中で壊れにくい特徴を持っています。それはC端に4つのセリン結合型糖鎖を持つ構造をしているためです。そこでhCGのC端にあるペプチドを付けたFSHを作れば、長時間効果のあるFSHができるので

はないかという発想です。排卵誘発剤として FSH は広く臨床に用いられていますが、効果を維持するためには連日注射を打たなければなりません。持続性 FSH ができれば、1 回の注射で十分な卵胞発育刺激作用が得られることになる訳です。遺伝子の改変から始まり蛋白合成、機能の解析を行い、長期効果持続 hCG が完成しました。結果的には我々は最初に論文を発表してから 12 年後の 2004 年に、この持続性 FSH を用いた体外受精で児が得られたとの報告があり、現在、アメリカで臨床治験が行われています。基礎研究が臨床的に評価されるためには長い時間が必要ですが、やはり臨床医としては、臨床に役立つ基礎研究を考えたいと思っています。

・臨床的研究

不妊治療においては、近年、生殖補助技術が急速に進歩し、様相が一変してきました。1978 年にイギリスで最初の体外受精児が誕生し、この技術はアッと言う間に世界中に広まりました。我々もこの分野で、卵巢刺激法、胚培養法、胚凍結法、顕微授精法などの改善のための臨床的研究を行ってきました。

また、高プロラクチン血症、先天性副腎過形成、先天性頸管欠損症、汎下垂体機能低下症、ターナー症候群や先天性腔欠損症などのホルモン異常症や性分化異常症の治療管理につき、研究してきました。特にこれらの「絶対的不妊」と考えられてきた疾患患者が、卵子提供や代理懐胎という生殖医療により、児を得ることが可能となってきた訳ですが、そこには大きな倫理・社会的問題点を露呈することになってきています。

<これから>

・ゴナドトロピンの構造と機能の解析

これまでの分析に引き続き、現在はゴナドトロピンの糖鎖認識部位の変異ホルモンを作製しています。人手や場所の問題もあり、現在、実験は共同研究施設にお任せ状態です。

・卵巢老化メカニズムの解明

生殖医療を通じて明らかになってきたことの 1 つに、卵子は加齢によって急速にその質を低下させることですが、その機序は不明のままです。我々

は加齢に伴い、ミトコンドリア DNA 欠失の蓄積が卵巢で起こることを明らかにしてきました。今はミトコンドリア遺伝子多型と閉経との関連、卵巢老化物質の同定などを試みています。

・生殖医療におけるチーム医療の構築

生殖医療は医師のみならず、胚培養士（エンブリオロジスト）、不妊診療専門看護師、体外受精コーディネーター、不妊カウンセラーなどが一体となって行う統合医療と考えられます。我々は地域の不妊カウンセリングの実態などをこれまで調査してきましたが、明確なチーム医療システムを構築することは必須の課題と思われます。

現在、小児科医などとともに、小児がん長期フォローアップ外来の中で生殖医療サポートシステムを作り始めています。これは救命率が上昇した小児がん患者の QOL を考えた時、結婚・妊娠・出産は重要な点であるからです。未受精卵凍結、卵巢組織凍結、卵子提供が技術的に可能となった今、患者やその家族に最新の情報をいかに正確に伝えるかが、重要な責務となってきています。同様にターナー症候群などの長期フォローアップにおいても、小児科から内科、婦人科などへの transition の問題を取り上げています。

・「生殖」と「性」

生殖補助技術は急速に発展してきましたが、同時に「性」の問題も考えなければなりません。挙児が可能になればそれに付随する恋愛・性交・結婚の問題が浮上してきます。最近は変わりつつありますが、やはり日本では「性」に関してはやや閉鎖的ではないでしょうか。「性は生なり」であり、メスを入れなければならないという気がしています。今はターナー症候群患者の性意識調査を通じて、この問題を捉えていきたいと考えています。

・脳とジェンダー

性分化は染色体に始まり、性腺、ホルモン、内性器、外性器、容姿、意識によって規定されます。性同一性障害にみられるように、性別は決して単純なものではありません。「男と女の間」を解明するため、「男脳」、「女脳」の解析も計画しています。

研究ノート

「脳磁図とリハビリテーション」

リハビリテーション科学コース（作業療法学講座） 助教 松 林 潤

はじめに

私は大学院博士課程在籍時より「脳活動の非侵襲的計測」に関わっています。最近ではこのような分野の人がリハビリテーションの世界に入りこんできています。また逆に、リハビリテーションの分野の人も積極的に脳活動の計測にとりくむようになってきています。リハビリテーションの作用機序を明らかにしたい、治っていく脳の中を覗いてみたいという欲求の高まりがあり、それを画像や波形として取り出す努力をする人間が、両方の分野で増えてきていると考えてよいのではないかと思います。

本稿ではまず、私が用いています脳磁図という計測方法についてご説明しようと思います。また私が属する研究グループが、医学研究科附属高次脳機能総合研究センターとの共同研究として行なっているいくつかの試みについてご紹介します。

脳磁図計測

脳磁図 (magnetoencephalography : MEG) は脳波によく似ていますが、計測するものは電場ではなく磁場です。脳内の電気的活動に応じて発生する微小な磁場を、頭皮外に置いた磁場センサーによって計測するものです。計測している信号のおおもとは、大脳皮質の神経細胞の尖頂樹状突起に発生しているシナプス後電位の総和です。

脳磁場は地球の磁場に比べますと非常に微弱ですので、脳磁図を計測する時には磁気シールド室の中に入ってもら必要があります。そこで頭をセンサーに当てて、いろいろな刺激（体性感覚や視覚、聴覚など）を呈示したり、課題を行なってもらったりします。そしてその刺激や課題遂行に応じて発生してくる脳磁場の変化を調べます。な

お、脳磁図計測は非侵襲であり、繰返し行なっても生体に害はありません。

脳磁図計測と他の非侵襲的計測の比較

ヒトの脳の活動のようすを非侵襲的に調べる方法は、脳磁図以外にもあります。脳波、機能的MRI (fMRI)、近赤外光トポグラフィなどが知られていますが、これらの中に「万能」の計測方法—それさえあれば他の方法はもういらない、—というようなものはありません。それぞれの方法は計測している物理的対象も異なりますし、各種の制約もあります。どのような脳機能について研究したいかによって、どの計測方法が適切かは異なります。場合によっては二つの計測方法を組み合わせることが必要となる場合もあります。研究者は、それぞれの方法の長所短所を知り、狙う脳機能に合わせてうまく使い分けなければなりません。

脳磁図の特徴についてごく大ざっぱに説明しますと、脳磁図は刺激が呈示された後（あるいは運動の前後など）の数ミリ秒くらいの間に起こってくる脳活動を計測するのに非常に適しています。特に力を発揮するのは、一次体性感覚野・一次運動野の活動について調べる場合です。また、さまざまな周波数の律動脳磁場の変動（例えば α 波や γ 波の変動）がより高次な脳機能と関係しているということが示されつつあります。こういった律動脳磁場の変動は、刺激が呈示されたあとの数秒にも及ぶことがあります。

脳波と脳磁図はよく似通った計測方法で、同じ脳の電気的活動（シナプス後電位の変動）を反映するものですが、脳磁図の方が電流源推定が簡単です。しかし脳波には、コストが安い・頭の位置が多少動いても計測にあまり影響しない・長時間

計測が可能などの利点があります。

fMRI や近赤外光トポグラフィと脳磁図は、計測している物理的対象が大きく異なります。fMRI や近赤外光トポグラフィは、神経活動に伴って生じる血流変化（厳密に言えば酸化ヘモグロビン・還元ヘモグロビンの濃度変化）をみるものです。fMRI に比べ、脳磁図は時間分解能に優れています。しかし fMRI は空間分解能に優れる上、脳の比較的深部の活動も計測できるという利点があります。また近赤外光トポグラフィと比べますと、脳磁図は時間分解能・空間分解能に優れますが、近赤外光トポグラフィは被験者が体を動かしている状態でも計測が可能という利点があります。

このようにそれぞれの計測方法には得意分野があります。本項目の最初でも述べましたが、各計測方法の利点をうまく生かしてやる必要があります。

現在の取り組み

私の属する研究グループでは、三谷章教授の指導のもとリハビリテーションの作用機序を明らかにすることを目的とした研究を行なっていますので、そのうちのいくつかをご紹介します。これらの研究はいずれも医学研究科附属高次脳機能総合研究センターの福山秀直教授、長峯隆准教授との共同研究として行なわれているものです。

・下肢の運動イメージ

運動イメージ（実際に運動をするのではなく、頭の中で運動している状態を想像すること）は脳血管障害後の運動機能改善に活用できる可能性が指摘されていますが、まだ十分な知見が蓄積されていません。また、下肢の運動イメージの研究は上肢に比べ遅れています。当グループでは大学院生の本内隆裕が中心となり、下肢の運動を頭の中で想像したときに運動野の興奮性がどのように変化するかを検討しています。運動野の興奮性の指標として、運動野から発生する 20Hz 律動脳磁場を利用しています。

・鏡治療の作用機序

鏡治療は、脳血管障害後の上肢運動麻痺に対する療法として注目されています。これは鏡を用いて、健側上肢の運動を「あたかも麻痺側の上肢が動いているかのように」見せ、麻痺側の運動機能の改善を促すものです。当グループでは学部生の出口陽一郎と富永渉が中心となり、鏡による錯覚的視覚入力に運動野に与える影響について検討しています。この研究でも、運動野由来の 20Hz 律動脳磁場を利用しています。

・視覚性ワーキングメモリ

当グループでは大学院生の南千尋が中心となり、視覚性ワーキングメモリに関連する研究を行なっています。視覚刺激のもつ空間的な情報を記憶することが困難な患者に対して、評価あるいは訓練に利用できるような認知課題を作成しています。また、その課題を遂行する際に生じる脳磁場活動について検討しています。

おわりに

今回ご紹介した研究はいずれも本年度より取り組み始めたもので、目下精力的に計測を行なっているところです。全てがまだ始まったばかりという状態ですが、その不安定さを逆にとり、いろいろと挑戦してみたいと思います。リハビリテーションの現場で感じられる疑問を土台とし、さまざまな研究を組み立ててゆきたいと思います。

教育活動

新しい医学検査教育とその展望

検査技術科学コース 准教授 池 本 正 生

【はじめに】

過去半世紀を振り返ると、科学技術の発展はあらゆる分野において大きな変革をもたらし、とくに近代医療は生物科学あるいは生命工学の発展とともに飛躍的に向上している。京都大学において、生体肝移植や再生医療など高度先進医療は著しく進歩し、不治の病が治療可能な病へととなりつつある。このように医療の高度化を可能にした科学技術は疾病の診断・治療だけでなく、再生医療などの分野にとっても極めて重要であり、今後ますます大きな役割を担うと考えられる。この高度先進医療を支えるためには最先端の遺伝子工学技術、プロテオミクス技術、生物工学的技術などハイレベルの技術的側面と生命倫理観を備えたより全人的な教育システムの構築が望まれる。一方、医療の高度化あるいは専門化が進めば進むほど医療スタッフ間の連携が重要となるため、これまで以上に医療を横断的に捉え、チーム医療を推進・充実していく必要がある。その中で、診断と治療に深く関わっている臨床検査技師の今後の医学検査教育について触れてみたい。

【臨床検査技師教育の方向性】

バイオインフォマティクスは臨床検査情報など医療情報の包括的活用を目的とし、情報処理科学と生命科学の学問分野が融合して産まれた分野である。コンピュータシステムの発展とともに急速に発展した分野であり、疾病の診断・治療のみならず予防にも重要な役割を担う分野と考えられる。臨床検査技師はこの分野を担う専門技術者であり、従来の医学的知識のほか工学的知識、医療統計学、ゲノム情報管理システムなどについても学習し、あらゆる分野の医療情報を包括的に処理・管理す

る新しい分野への活路を開拓すべきである。そのためには、将来の医療環境を見据えた教育環境の整備・充実が急務であるが、学習環境の整備だけでいいはずがない。それ以上に大切なことは、専門技術者がそれぞれの専門分野で専門職としての価値観を見出し、誇りをもって取り組むことができる医療スタッフとしての意識を本質的に改革することではないだろうか。そうすることにより、医療全体が活気づき、結果としてより質の高い医療を実現させることができるであろう。

サイエンスは留まるところを知らない生き物（怪物？）のような存在であり、このような流れは分野を問わず時代の趨勢でもある。このような時代背景の中で、臨床検査技師が臨床研究と基礎研究にどこまでその専門性を生かすことができるかどうか、今後取り組む課題であると考ええる。

【医学検査技術に対する基礎教育】

人類永遠のテーマとして取り上げられていたヒト遺伝子の全塩基配列が解読されたことから、生命科学はタンパク質の機能解析へと羅針盤の設定変更を余儀なくされているといつてよいだろう。しかし、遺伝子に関しては独自の研究分野がまだまだ残されている。例えば、腫瘍における悪性化が特有の遺伝子変化であることが明らかとなった頃から、がんの確定診断に結びつける遺伝子解析技術が開発され臨床応用されている。また、がんの早期診断だけでなく予後や治療効果判定予測にも発展・貢献してきた。この技術は、患者個人に対する医療、すなわち「オーダーメイド医療」として活用され、疾病の予防を目的とした医療として定着していくであろう。最近注目されたのは、皮膚の細胞から iPS 細胞を作製する技術が京都大

学再生医科学研究所の山中教授らの研究グループによって確立されたことである。この研究は重要な4つの遺伝子の発見が今回の画期的な成果に繋がったのである。この分野は遺伝子とタンパク質に関係しており、まさに検査技術科学専攻の卒業生がその能力を十分に発揮できる分野であると思われる。このような背景において必要とされるのはどのような教育なのであろうか。京都大学における教育の特長はそれぞれの学問分野の基礎教育に重きを置いていることである。この伝統的な教育を継続するためには、教育・研究のための人的パワー及びインフラの整備が必要であるが、これらすべてのことを一気に解決することは大学という枠組みだけでは難しい。したがって、そこに産学連携体制で取り組む一貫した教育システムを構築する余地が残されているし、また望まれるのである。

アメリカの検査技師教育は産学連携システムを十分に活用しており、移植医療をはじめとする高度先進医療だけでなく、スポーツ医学、すなわち血中薬物濃度の測定に代表されるドーピング検査や健康医学など人間を取り巻く環境医学にも深く関わっている。このように、多くの分野で臨床検査技師が活躍するのは、その活躍に対する社会的評価があるからである。我が国においても臨床検査技師教育を幅広い視野から捉え、従来の水平思考だけでなく垂直思考的な教育を目指したより柔軟な考え方が必要ではなかろうか。

【医療における情報理工学の役割】

1. バイオインフォマティクス

コンピュータの発明は人類史上最も革命的な変革をもたらし、あらゆる分野において人々を取り巻く環境を一変させたといつてよい。臨床検査の分野においては日々膨大な検査情報が臨床側に提供されているが、それぞれが十分に活用されている訳ではない。それゆえ、これらの情報を大いに活用することが期待されているのである。すでにゲノム解析も終焉し、これらの情報を多くの疾病予防に生かそうとする試みが進んでいる。このよ

うな予防医学は、情報科学における臨床疫学や統計・推計学の考え方を必要とするので、コンピュータ技術を駆使した検査情報処理科学を新しい臨床検査医学分野に積極的に導入する必要がある。そのためには、膨大な検査情報を専門的に処理・解析できる専門技師が不可欠である。本学科に設置されている情報理工学講座はまさにこのような分野を発展させるために相応しい講座である。

2. 医療情報のネットワーク化と健康科学への貢献

臨床検査技師教育が始まってから約半世紀が過ぎた今日において、その教育システムの変革期にあるのがまさに21世紀である。これまで、臨床検査は病因・病態を科学的に把握し疾病の診断・治療に大きく貢献してきた。これからも医療において重要性は変わらないばかりか、むしろますます重要となるだろう。それは、健康ブームを反映した国民の意識が予防医学へとシフトしているからである。とくに、最近は食品への関心が高まっており、患者だけでなく健常者を対象とした健康科学が注目されている。「すべての国民が健康に」というスローガンを旗印に、健康で明るく元気に生活できる社会を実現することが望まれている。地味ではあるが検査技術を国民の健康管理に生かすためにも、そのような国民の願いに対して本学科は真摯に対応し健康科学に対する責任を果たすべきであると考えます。そうすることによって、人命に関わるあらゆる分野において検査技師の活躍の場は広がっていくだろう。

医学部保健学科新入生合宿研修

「新入生合宿研修便り」

学生厚生支援委員会委員長
看護科学コース 教授 成 木 弘 子

合宿研修の数日前まではお天気が怪しく、当日が雨だったらどうしようかと心配して、数年ぶりに“てるてる坊主”を作りました、「晴れたら金の鈴あげる」と……。というのも、雨が降ったら中止になる新しいイベント、“キャンプファイヤー”にチャレンジした為です。みんなの祈りが通じたのか、当日は晴れ！。例年ならまだ冬のなごりがある花背ですが、今年は春の暖かさにも恵まれ、寒さに凍えるということもないという嬉しいおまけつき。それもこれも、半年も前から話し合いを重ねてきた2回生リーダー達の思いが、天に通じたのではないかと思います。

この研修は、新入生が新しい大学生活に早くと

け込めるように、京大生らしい主体性が発揮できるようにとの願いから始められました。4回目に当たる今年は、2回生の主体的なリーダーシップの発揮が眩しい程に輝いて見えました。半年間の準備で色々なアイデアが出され、実現できなかった提案もありますが、そのプロセスそのもので色々な体験を重ねていった姿があったと感じています。

新しいチャレンジのキャンプファイヤーは、暗くなった空の下、「ジャック・スパロウ」もどきの2回生リーダーの登場からそれは始まりました。楽しいショーあり、ダンスあり、チーム対抗クイズあり……炎に照らし出される2回生も1回生も、



笑い声が絶えない一時となりました。翌日は新しいチャレンジ2つ目のチーム対抗ドッチボール大会。体育館のようなホールで久々に思い切り身体を動かし、チームで作戦を立てながらの対戦。大きなケガをする学生もなく、エネルギーを発散できたようです。楽しく充実したイベントを運営する頼もしい2回生リーダー、その姿に信頼を寄せていく新入生、先輩と後輩の間に見えない確かな絆ができていく様子を実感できた2日間となりました。

しかし、学生の主体性を大切にすることはいても、大切な学生達を保健学科として預かって実施する学科行事には変わりありません。場面を盛り上がるのが学生達だとしたら、その学生達が安心して、そして安全に力を発揮する環境を作るのは教職員の役割であることにも変わりありません。半年間学生リーダーと一緒に試行錯誤しながら根気よく準備を重ねてくださった教務掛の方々、出発から解散まで宿泊も含めて参加してくださった各専攻から選出された先生方、ガイダンスを担当してくださった先生方、自由参加で学生と楽しい一時を過ごそうとしてくださった先生方、そして、学生達が安心して安全に伸び伸びと活躍できるように配慮してくださった笹田学科長に心よりお礼を申し上げます。

来年度の合宿研修に向けた準備は10月からスタートしました。新しくリーダーとなった1回生の方々は、元気に返事をする明るいみなさんです。翌年どんな風に合宿研修を運営してくれるのか今から楽しみです。保健学科のすてきな伝統のイベントに発展していくことを願っています。

「大学院医学研究科人間健康科学系専攻」開設記念行事を実施

開設記念事業委員会委員長

看護科学コース 教授 櫻庭 繁

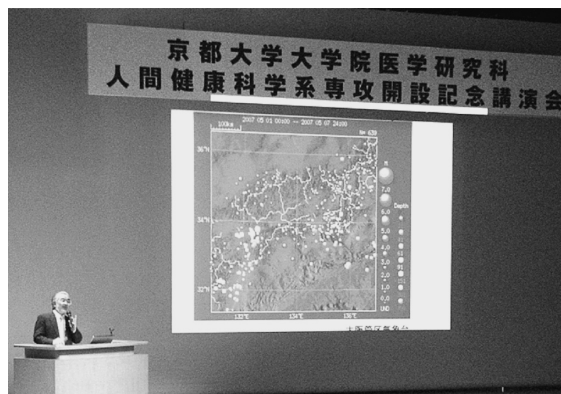
京都大学大学院医学研究科では5月14日、本年4月に開設した「人間健康科学系専攻」の開設記念行事を実施しました。本専攻は、高度先進医療と高齢社会に対してキュアとケアの視点から対応できる高度医療専門職の育成と将来の教育者・研究者の育成を目指すものです。

看板上掲式が、尾池和夫総長、丸山正樹理事、東山紘久理事、木谷雅人理事、北徹理事、西村周三理事、原潔監事、成宮周医学研究科長、塩田浩平医研究科副研究科長、笹田昌孝人間健康科学系専攻長ら出席のもと、玄関前で行われました。看板は門柱に設置するため、あらかじめ設置すると道路に面しているところでの上掲式となるため、銘板だけを玄関に仮設置し除幕することになりました。看板自体は鋳物でできており、見かけ以上にとても重いもので、どのように設置するかが最大の懸案。そこで、縁の下の力もちである事務課長や掛長はさっそくハシゴに木を取り付けるなど、重い看板を支える台を急ぎょ製作、日用大工の傑作が完成し、無事に上掲式を執り行うことができました。



引き続き行われた記念植樹、選ばれた木は「ゆず」でした。中国原産の樹木である「ゆず」は、寒さにも暑さにも強く、独特の香りを放つその果実は、さまざまな形で利用され、多くの人びとに愛されています。新専攻もまた「ゆず」のように愛され、また、人びとの健康と発展への寄与を願い、多くの実りがあるようにと植樹されました。

(その後、毎日の水やりや剪定など、事務方の陰ながらの尽力のもと、かわいい実を8個つけました。八は「末広がり、開くの義」と、ますますの発展を応援するかのように縁起のよい、初めての実りとなりました。)



この後、場所を京都大学百周年時計台記念館に移し、記念講演会、記念式典、記念祝賀会が行われました。記念講演会は、尾池総長の「地球と俳句と健康科学」、本庶総合科学技術会議議員の「幸福感の生物学的考察」と題した講演、いずれも温かな思いのあふれる内容で、開設記念にふさわしいご講演をいただきました。

また、講演の合間には京都大学交響楽団と関西21世紀交響楽団のジョイントによる祝賀演奏が



行われました。記念行事運営委員による選曲は、京都大学学歌、森ヶ崎海岸、エーデルワイスなど、いずれも大好評。情熱あふれる指揮をしてくださった磯貝富治男さんは大阪フィルハーモニー交響楽団のトップ奏者でもあられ、両楽団の息もぴったりの感動的な演奏でした。一般市民を含め約 400 名の参加者は熱心に聞き入っていました。

記念式典では、関係者約 100 名の出席のもと成宮医学研究科長の式辞に続いて、尾池総長の挨拶、笹田人間健康科学系専攻長の専攻設置の経緯説明、岡本道雄元総長（代読笹田専攻長）、三浦公

嗣文部科学省高等教育局医学教育課長、山田啓二京都府知事（代読小石原範和副知事）、山岸久一京都府立医科大学学長、森洋一京都府医師会会長の祝辞、さらに池坊保子文部科学副大臣ほかからの祝電の披露があり、新専攻への大きな期待が述べられました。

また、引き続き行われた記念祝賀会では、井村裕夫元総長の挨拶に続き、榊本頼兼京都市長（代読上原任副市長）の祝辞があり、鏡開きの後、西島安則元総長の音頭による乾杯が行われ、歓談のなかでは、武田隆男武田病院グループ会長、新研究棟建設費として多額の寄附を寄せられた高井保治株式会社フジタカ代表取締役社長、西城嘉子京都府看護協会会長（代読松本尚子副会長）からお祝いのスピーチや、ハープ奏者内田奈織さんによる祝賀演奏があり、なごやかな雰囲気の中新専攻の門出を祝いました。

「京都大学オープンキャンパス 2007」報告

オープンキャンパス部会長

看護科学コース 教授 齋 藤 ゆ み

京都大学オープンキャンパス 2007 は、「あなたを待つ、探求と創造の扉」をキャッチフレーズとして8月9日（文系）、10日（理系）の2日間に亘って開催されました。オープンセレモニーは時計台記念館百周年記念ホールを会場として行われ、収容人数の制限で参加定員が設けられましたが両日で1,060人（充足数106%）が参加しました。学部説明会などその後のプログラム参加者数は、全国各地から高校生、保護者、引率者など8,487人（申込者の参加率は108.6%）に上りました。これは昨年度を1,277人上回り、年々参加者の増加が見られています。

両日とも、午前9時から100周年時計台記念館にて尾池和夫総長の「京都大学をめざす皆さんへ」と題された講演や、京都大学応援団による演舞や「在学生からの熱いメッセージ」などがあり、会場は熱気で盛り上がりました。

今年は会場の定員限定で入りきれなかった人のための対処として附属図書館、総合博物館、時計台展示ホールその他、学術情報メディアセンター北館が開放され、また例年のように京大キャンパスツアーなどの企画が準備されました。

その後、学部（学科）ごとにそれぞれの校舎等で「学部企画」が開催されました。保健学科の説明会は、10日B時間帯に京都教育文化センター大ホールで実施されました。全参加者は163人（参加率75.8%）で内訳は看護学専攻78人、検査技術科学36人、理学療法学専攻38人、作業療法学専攻11人でした。

学部企画プログラムとしてまず、医学研究科人間健康科学系専攻長の笹田昌孝先生から保健学科は人間健康科学の探求によって日本の医療の未来を導く存在となることが期待されているとの熱いメッセージが参加者に送られました。引き続き、看護学専攻、検査技術科学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻の順に専攻の紹介が行われ、授業内容、将来の進路、各分野の健康科学としての理念や今後の発展の可能性が語られました。

引き続いて、各専攻に分かれ、個別相談や施設見学を行いました。本年度は耐震補修の工事と重なったため、学内施設見学は行われず、看護学専攻以外の専攻で京大病院の関連施設の見学を実施しました。

個別相談は京都教育文化センターの個室でそれぞれの専攻毎に実施され、保健学科教員及び在校生も各専攻、数名ずつ参加して学生の立場から生き生きと質問に答えていました。その成果は以下のアンケート結果からみることができます。

学部に入学したいと思った人は49名（39.5%）で、有意義だったと感じた人は54名（43.3%）でした。83%の高校生が学部説明会に参加した意義を評価していました。平成19年度入学者の中で30.9%の学生がオープンキャンパスに参加していることを見ると、オープンキャンパスの重要性が伺えます。そのほか参加者の具体的意見としては「4専攻あるため、1専攻の説明時間が短い」「わかりやすいスライド説明だった」「いろいろ体験できてとてもよかった」「あらためて入学したい



と思った」「看護の施設が見学したかった」「演習中の様子を知りたかった。ビデオなども使ってほ

しかった」「現役の学生さんに理学療法士の話が聞けてよかった」「幅の広い視野を持った教員にお会いできてよかった。大学の可能性を感じました」「直接話が聞けてとても刺激になりました」など今後のオープンキャンパスを企画する上での有用な参考意見が聞かれました。

本年度のオープンキャンパスは校舎の工事中に開催されましたが、教職員、学生の皆様のご協力により無事終了することができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

第 20 回（2007 年）健康科学市民公開講座を終えて

健康科学公開講座部会長

看護科学コース 准教授 若 村 智 子

雲ひとつない清々しい秋晴れの 10 月 20 日午後、本年度の第 20 回公開講座が開催された。それとは裏腹に、今年は、耐震改修工事で保健学科の建物が全く使用できない情勢の中、まず、会場となる場所探しから今年の部会の活動は始まった。芝蘭会館、京大会館などがすでに予約済みで使用できず、唯一百周年記念館時計台ホールだけがこの日空いていた。経費などを検討の上、時計台ホールでの開催が決定された。この事は今までの 200 名程度の規模の公開講座から、今年は 500 名規模になることを必然的に意味していた。

そのようなことを踏まえて、看護科学コースの教員にキーワードを考えていただき、同時に公開講座の開催日と日程があう講師の調整が始まった。最終的に「老いをいきいきと」というテーマで講座の骨格が決まったのが 8 月の上旬というあわただしいスケジュールになった。

講義は、表 1 に示すようなスケジュールで開催した。合わせて、今年度は、人間健康科学系専攻大学院が開設された年度でもあり、開設記念行事としても位置付けられることになった。

表 1 第 20 回健康科学市民公開講座

	タ イ ト ル	講 師
第 1 講 13:05	老いを楽しく	幸・総合人間研究所 所 長 早 川 一 光
第 2 講 14:35	認知症の病態を探る	医学研究科人間健康科学系専攻 教 授 木 下 彩 栄
第 3 講 15:25	地域で老いをすこやかに	医学研究科人間健康科学系専攻 准教授 星 野 明 子

第一講は、老いをいかに楽しく生きるのかについて、実際の事例を通して、歌あり、手話ありの授業が展開された。受講者は、80 分の間、拍手をしたり、笑ったり、歌ったりと休む暇がなかった。第二講は、認知症のメカニズムについて、わかりやすく、最新の知見を含めながら授業が展開された。第三講では、地域の中で、老いとどのように向き合うのかをテーマに実践活動の紹介があった。健康な高齢者の参加が今回は多かったが、地域でどのような中核を担っていけばよいのかの示唆も与えられたようであった。この講義は水戸黄門のテーマソングを使って簡単な体操で終了することになっていたが、受講者のほとんどの方が立ちあがって、この体操に参加していた。学生が

デモンストレーターとしてステージの上と客席の間に立ったので、その場がとても盛り上がった。全体を通して参加者と講師との一体感をもった雰囲気は、いきいきと楽しく過ごすことの意味を実感として感じていただけたようで、企画・準備したスタッフ側として手ごたえを感じることができた。

今回の講座では、630 余名の申し込みがあり、定員を上回ったために、一部受講をお断りしたが、実際の参加者は、349 名にとどまった。この理由の一つに、今回は、例年とは異なり受講票を発行しなかったことが考えられる。新聞社が記事として事前に取り上げてくれたが、受講票に関する記述がなく、前日まで電話の問い合わせが続き、混

乱している様子がうかがえた。また、どの程度の欠席率を見込むのかも毎年の課題であるが、今回は、応募状況からそれが読み切れず、会場定員数でお断りしたことも、参加者が思ったよりも少なかった要因であろう。今回は、借りたホールであるため終了時刻が決まっており、質問を受ける時間がとれなかったことが参加者に不満を残すことになった。次回からは自前の講義室で企画できるので、そういう不自由は今回だけにしたい。

また、概ねこの企画は満足されていたことがアンケートからうかがわれた。アンケート結果からは60代以上の参加者が男女合わせて86%も占め、ご夫婦での参加も多かった。また、過去からの講座は数えて20回目となったが、6回以上の参加者は16%であり、15回参加者を含めて、本学からの案内状で参加された方が97名おられたことは、保健学科の公開講座が市民に定着してきたことを示している。忘れてはいけないことは、医療関係などの専門職種の参加も毎年見受けられていることである。そういう意味では、専門職向けのリカレント教育も、京都大学が果たすべき使命の

ひとつといえる。いずれにせよ、このような人々の関心の高い健康科学分野での市民講座の開催で、わが保健学科が果たす役割は大きい。健康は自分の身近な問題としてとらえることができ、なおかつ関連する最新の知見をも確認できる問題と言える。今年は、いろいろな条件が重なり、思いがけず、慣れない大きいホールでの開催になったが、多くの人の参加があったことからそのようにも分析できよう。

最後に、高齢者の参加が多かったにもかかわらず、事故なく無事に終了したことはとてもありがたかった。内情を暴露することになるが、事前の600名余の申し込みに、入力作業が追い付かず、事務職員の毎日の残業が増えることになった。当日は、学術委員で運営を行ったが、10月1日で異動になった担当の事務職員の方々も応援にかけつけてくださり、こまやかな配慮のおかげで無事に終了出来た。あわせて保健学科看護学専攻の3回・4回の学生の計5名も照明・舞台・会場係としてお手伝いいただいた。この場を借りて、みなさまのご協力に厚く感謝申し上げます。

人 事 異 動

発 年 月 令 日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成				
19. 3. 31	教 授	福 田 耕 治	検査技術科学専攻	定年退職
19. 3. 31	教 授	月 田 早智子	検査技術科学専攻	辞職
19. 3. 31	助 教授	種 村 留 美	作業療法学専攻	辞職
19. 3. 31	助 手	小 野 泉	作業療法学専攻	辞職
19. 4. 1	教 授	鈴 木 眞知子	看護科学コース	採用（日本赤十字広島看護大学より）
19. 4. 1	教 授	杉 本 直 三	検査技術科学コース	昇任（情報学研究科より）
19. 4. 1	講 師	渡 邊 浩 子	看護科学コース	採用
19. 4. 1	助 教	久保田 正 和	看護科学コース	採用
19. 4. 1	助 教	東海林 美希子	リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	採用（京都障害児福祉協会児童療育センターより）
19. 4. 1	助 教	白 井 はる奈	リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	転任（医学部附属病院より）
19. 4. 1	助 教	松 林 潤	リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	採用
19. 4. 3	助 教	松 井 洋 子	看護科学コース	採用（任期付教員平成 20 年 3 月 31 日まで）
19. 5. 1	教 授	齋 藤 邦 明	検査技術科学コース	採用（岐阜大学より）
19. 5. 31	准教授	祖父江 育 子	看護科学コース	辞職
19. 9. 1	教 授	精 山 明 敏	検査技術科学コース	採用（大阪大学より）
19. 9. 30	准教授	ブライアン バジエル	リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	辞職
19. 9. 30	助 教	宮 田 雅 子	看護科学コース	辞職
19. 10. 1	総務担当 専門職員	加 藤 泰 久	事 務 部	転任（基礎物理学研究所総務掛長へ）
19. 10. 1	教務担当 主 任	森 忠	事 務 部	昇任（地球環境学堂総務・教務掛長へ）
19. 10. 1	会計担当 主 任	谷 川 牧 子	事 務 部	転任（ウイルス研究所主任へ）
19. 10. 1	会計担当 事務職員	吉 雄 聡	事 務 部	転任（財務部財務企画課予算グループへ）
19. 10. 1	総務担当 専門職員	吉 村 淳 郎	事 務 部	転任（学生部学生課総務企画グループ専門職員より）
19. 10. 1	会計担当 事務職員	砂 田 明 展	事 務 部	転任（農学研究科等経理課第一経理掛より）
19. 10. 1	会計担当 事務職員	荒 川 小夜子	事 務 部	転任（学生部学生課学生企画グループより）
19. 10. 1	教務担当 事務職員	古 川 友 里	事 務 部	転任（総務部総務課法規企画グループより）

— 訃 報 —

後藤 俊幸 准教授

後藤俊幸先生は、4 月 16 日逝去された。享年 59。

先生は昭和 45 年京都大学農学部林産工学科を卒業後、同大学大学院農学研究科にて微生物学、ウイルス学を学ばれ、京都大学農学博士号、大阪医科大学医学博士号を授与された。カナダ・モントリオール大学化学学科に留学の後、大阪医科大学助手、講師を経て、平成 13 年本学医療技術短期大学部助教授、平成 15 年本学科検査技術科学専攻助教授に就任された。

先生は本学科において、微生物学、同実習の講義を始めとして学生の教育に熱心に取り組まれとともに、電子顕微鏡を手法として用いるウイルス学、微生物学分野、特にヒト免疫不全ウイルスの

構造と感染過程の電子顕微鏡的研究領域において数多くの研究をされ、平成 8 年日本電子顕微鏡学会論文賞を受賞されるなど、この分野の発展に貢献された。また、日本電子顕微鏡学会理事、同関西支部長を歴任されるなど、学会活動にも献身され、臨床病理技術士資格認定試験委員や日本電子顕微鏡学会技術認定委員を務められ、後進の指導にもあたられた。

先生はまた、本学を中心に多くの研究者の協力を得て病原細菌データベースを構築し、インターネットを通じて一般に公開することにより、研究により蓄積された学術情報の統合と保全にあたり、その有効活用をはかるなど、広く微生物学の発展のために最後の瞬間まで尽力された。

日誌

12. 7	将来計画検討委員会	5. 8	研究検討委員会
12. 14	将来計画検討委員会	5. 10	将来計画検討委員会
12. 20	教員会議・教授会議		教員会議・教授会議
12. 21	学生厚生支援委員会合宿研修部会	5. 14	大学院人間健康科学系専攻開設記念行事 (時計台記念館)
	将来計画検討委員会	5. 17	教務・教育委員会
	入学者選抜検討委員会	5. 24	学生厚生支援委員会
12. 22	教務・教育委員会	5. 31	将来計画検討委員会
12. 26	広報委員会保健学科紀要健康科学部会	6. 11	研究検討委員会
12. 27	臨床教育委員会	6. 13	広報委員会保健学科紀要健康科学部会
	萌芽研究報告会	6. 14	将来計画検討委員会
1. 4	健康科学研究交流会		教員会議・教授会議
1. 11	臨時教員会議	6. 19	広報委員会ホームページ部会
	将来計画検討委員会	6. 21	将来計画検討委員会
1. 13	教員会議・教授会議		教務・教育委員会
	災害医療を考えるシンポジウム(時計 台記念館)	6. 28	将来計画検討委員会
1. 15	五〇会総会		臨時教授会議
1. 18	将来計画検討委員会	7. 5	入学者選抜検討委員会
	教務・教育委員会		将来計画検討委員会
1. 20~21	学生厚生支援委員会合宿研修部会	7. 12	将来計画検討委員会
1. 25	大学入試センター試験		教員会議・教授会議
1. 26	入学者選抜検討委員会	7. 18	学術委員会
1. 30	大学院入学試験	7. 19	将来計画検討委員会
1. 31	臨床教育委員会		教務・教育委員会
2. 1	入学者選抜検討委員会	7. 25	学生厚生支援委員会
	将来計画検討委員会	7. 26	将来計画検討委員会
	臨時教授会議		臨時教授会議
2. 8	広報委員会ホームページ部会	8. 7	広報委員会保健学科紀要健康科学部会
	教務・教育委員会進級検討部会	8. 9	教務・教育委員会
	入学者選抜検討委員会	8. 10	オープンキャンパス2007 〔保健学科説明会〕
	将来計画検討委員会		臨時教授会議
	教員会議・拡大教授会議・教授会議	8. 23	学術委員会
2. 9	大学院合格発表	8. 24	3年次編入学試験
2. 13	福田(耕)教授、月田教授最終講義及 び歓送会(芝蘭会館)		大学院博士課程設置委員会
2. 15	編入学試験合同会議	8. 30	将来計画検討委員会
	入学者選抜検討委員会	8. 31	大学院入学試験
	教務・教育委員会	9. 3	研究検討委員会
	学生厚生支援委員会合宿研修部会	9. 5	教務・教育委員会
2. 22	将来計画検討委員会	9. 6	入学者選抜検討委員会
2. 25~27	前期日程入学試験		臨時教授会議
2. 27	臨床教育委員会	9. 13	将来計画検討委員会
3. 2	学生厚生支援委員会		教員会議・教授会議
3. 8	将来計画検討委員会	9. 14	3年次編入学試験・大学院入学試験合 格発表
	教員会議・教授会議	9. 19	広報委員会保健学科広報・案内誌部会
3. 9	入学者選抜検討委員会	9. 27	将来計画検討委員会
	臨時教授会議		学生厚生支援委員会
3. 10	前期日程入学試験合格発表		萌芽研究報告会
3. 12	後期日程入学試験	10. 11	将来計画検討委員会
3. 14	産業医の巡視		教員会議・教授会議
3. 15	教務・教育委員会進級検討部会	10. 18	教務・教育委員会
3. 19	医療技術短期大学部卒業式・修了式	10. 20	第20回健康科学市民公開講座 (時計台記念館)
3. 20	教務・教育委員会		自己点検・評価実施委員会
	臨床教育委員会	10. 24	将来計画検討委員会
	入学者選抜検討委員会	10. 25	教務・教育委員会
	拡大教授会議・臨時教授会議	10. 26	研究検討委員会
3. 21	後期日程入学試験合格発表	10. 29	大学院博士課程設置委員会
3. 22	将来計画検討委員会		学生厚生支援委員会合宿研修部会
3. 23	広報委員会保健学科紀要健康科学部会	11. 1	研究検討委員会
4. 5	入学者選抜検討委員会	11. 8	将来計画検討委員会
	将来計画検討委員会		教員会議・教授会議
4. 6	入学式	11. 14	教務・教育委員会
4. 11	学生厚生委員会	11. 21~26	11月祭
4. 12	教員会議・教授会議	11. 28	大学院博士課程設置委員会
4. 19	将来計画検討委員会		学生厚生支援委員会合宿研修部会
	教務・教育委員会	11. 29	将来計画検討委員会
4. 21~22	新入生と教員の合宿研修(花背山の家)		臨時教授会議
4. 25	医療技術短期大学部閉校式・懇親会 (芝蘭会館)		

あとかき

保健学科ができて4年目、平成19年はいろいろな事がありました。4月には、大学院医学研究科人間健康科学系専攻がスタートしました。7月からは、学舎の耐震改修工事が本格化し、さらに、新たな研究棟の建設を伴うものとなりました。そのため、多くの教職員が短期間の引越し作業を繰り返し、12月になって一足先に耐震改修を終えた教員棟によってようやく落ち着くことができました。

そのような中でも、5月には大学院開設記念式典が時計台記念館において行なわれ、新入生合宿研修、オープンキャンパス、健康科学市民公開講座は、関係者諸氏の御力により例年通り無事に開催することができました。本館の耐震改修工事も

後3ヶ月ほど、生まれ変わった外観をおぼろげに見せつつあります。年が明けると、いよいよ3月には保健学科の第一期生が卒業し、新たな門出を迎えます。

例年は半期に一度、年に2号発行する広報ですが、本年度は諸事情により合併号となりました。大学院医学研究科人間健康科学系専攻を冠する最初の広報であり、同時に、来年度からは人間健康科学科と改称される保健学科の名を冠した最後の広報でもあります。

平成19年師走

広報委員会保健学科広報・案内誌部会長

笹山 哲